

ニューヨーク研修を通して

ニューヨークでの2週間の英語研修は、私にとって非常に充実した学びの機会でした。人生で最長の海外生活となり、人生で最大に英語に触れた機会でした。そもそも私は英語が得意ではありません。得意ではないと言うどころか苦手で嫌いです。どのくらいかと言うと、大学受験で最も苦戦したのが英語であり、英語論文を読むときはとりあえず翻訳サイトにコピペするような人間です。もちろん英会話なんてさっぱりです。そんな人間がどのように研修を行ったのか記載して行きます。

1.1 ペース大学での英語研修

研修の初めに PACE 大学で行った英語研修では、医療専門用語の習得と医療現場でのコミュニケーション技術の向上を図りました。特に強調されたのは、コミュニケーションの際に重要な言語だけでなく表現力と理解力の向上でした。

1.2 PHELPS 大学での ACLS 研修

PACE 大学での英語研修の後、PHELPS 大学にて ACLS (Advanced Cardiovascular Life Support) の研修を受ける機会がありました。この研修では、心停止や心筋梗塞などの緊急事態に対する対応方法を学び、特に緊急時の対応力を強化することを目指しました。ACLS は、救急医療の場面で必要な高度な知識と技術を習得するプログラム

であり、研修はシミュレーションを通じて実践的なスキルを磨くことに重点を置いていました。

この研修では、英語での専門的な指示や手順に従う必要があり、医学用語や技術的な内容を英語で理解し実践することが求められました。特に英語での指示を正確に理解し、シナリオに沿って迅速かつ適切に行動する訓練は、私にとって大きな挑戦でした。研修中に多くの専門用語に触れ、それらを使って実際にシミュレーションで行動することで、理解が一層深まりました。

研修を通じて特に驚いた点は、日本とアメリカで使用される薬剤名が異なることです。日本でよく使われる薬剤がアメリカでは別の名称(例アドレナリン→エピネフリン)で呼ばれており、最初は戸惑いを感じました。また、アメリカの ACLS 研修では、日本の ACLS と比較してより専門的な部分まで学ぶことができ、特に緊急時の対応において細かい手順や高度な技術が重視されていることが印象的でした。

1.3 PACE 大学での医療面接研修

再び PACE 大学に戻り、実践的な医療面接研修を行いました。ここでは、実際の医療面接の状況を模した練習を行い、患者との対話スキルをさらに向上させることを目指しました。模擬患者を演じてくれた現地で活躍する方々とともに、面接のプロセスをシミュレーションし、よりリアルな状況での英語力を高めました。

この研修では、より正確な文法や発音スキルが重視されました。また、患者との信頼関係を築くためのコミュニケーション技術や、患者の非言語的なサインに対する理解を深めることができました。

1.4 実際の医療現場での Shadowing

研修の後半には、実際の医療現場での Shadowing を行いました。私は Dr.Anzai と Dr.Rebarber の元へ行きました。どちらも現地の産婦人科医で、現地の医療スタッフと共に日常的な業務を見学し、実際の医療プロセスを体験しました。現地のドクター患者ともにとっても友好的で、実際の医療現場での動きや、英語を使ったコミュニケーションの実際の流れを学ぶことができました。

Shadowing を通じて、患者とのやり取りや医療チームとの連携がどのように行われているかを間近で見ることができ、日本とは違う現場での対応学ぶことができました。

2. 成果と学び

研修を通じて、医療英語だけでなく日常的な英語力が大きく向上しました。専門用語や医療関連の表現だけでなく、英語に囲まれて生活することで日常英会話に対する理解が深まりました。ACLS や医療面接のスキルも実践的に磨かれ、即応力や対話力の向上を実感しました。

はじめにも記載しましたが、人生で最長の海外生活となり、人生で最大に英語に触れ

た機会でした。残念ながらポキャブラリーは簡単には増えません。ですが、英語に限らず言語は便利なもので、より簡単な表現であったり、多少のニュアンスは変わるかもしれませんが、自身が伝えたい内容を簡便化して伝えることは可能です。

英語が苦手であっても現地で暮らすためには英語を話す必要があります、必要に駆られると意外となんとか出来るものです。なるべく翻訳機を使わないように意識し、生活していると2週目にはカフェやレストランでの注文や博物館観光・道を尋ねる程度であれば何の問題もなく出来るようになりました。

3.結論

アメリカでの英語研修は、日常英語スキルの向上と異文化理解の深化において、非常に有意義なものでした。グローバル化が進む現代において残念ながら英語は避けては通れません。どれだけ関わりたくなくとも医療者である限り英語論文を読む必要はあり、完全に排除し切ることは困難です。

私はそんな英語嫌いな人にこそこのプログラムに参加していただきたく思います。ぜひ、英語に関わらざるを得ない環境で自身の「comfort zone」から飛び出してみてください。「The sky is the limit」です。

金沢大学 研修医 橋本文瑠



PACE 大学キャンパス前にて



PACE 大学研修終了時